

ボランティアの経験が豊富な田川さん夫婦。2008年に開催された大分県にも参加した安一さんは、もう10年以上も携わる、スポーツボランティアのベテランだ。「4年に一度じゃない。一生に一度だ」がキャッチフレーズのラグビーワールドカップ2019™にも、夫婦でいち早く応募。公式ボランティアだけでなく、大分市市民ボランティアにも採用された。大分市市民ボランティアは、まちなかの案内やイベントのサポートなどを行い、600人以上が登録されている。「たくさんの人々と交流できるのが楽しみ」と法子さんも大会への期待を膨らませている。

そんなお二人は、実はラグビーとも縁が深い。次男が小学生の頃から大分ラグビースタールに所属し、中学卒業まで、送迎や遠征の手伝いなどで毎週のようにラグビーに関わっていた。法子さんは試合を観戦するのも大好きで、これまでのスポーツボランティアとはまた違う意気込みで望んでいる。「今大会は一生に一度のビッグイベント。貴重なチャンスだと思って参加しました」と安一さん。「笑顔は、万言に勝るインターナショナルサイン。言葉は通じなくても笑顔は共通です。一期一会の精神で出会いを大切にしたい。笑顔で明るく、元気なおもてなしをさせていただきます」と、意気込む笑顔も晴れやかだった。

田川安一さん(77歳)、法子さん(75歳)。安一さんは保護司など社会奉仕活動にも長く携わり、スポーツボランティア歴も10年以上。6年前からは夫婦でボランティア活動に携わっている。



田川安一・法子 支える

高部春菜

ラグビーワールドカップ2019™の際の大分市市民ボランティア



高部春菜さん(27歳)。大分市内の小学校に勤務。留学で身につけた英語を生かせればと、スポーツボランティアに初参加した。

今回がスポーツボランティア初挑戦となる高部さん、実は当初、ボランティアの募集を知らなかったのだとか。「本当はチケットを買いたかったんですけど、日程も平日が多かったので諦めようと思っていたら、同僚の先生に『ボランティアの募集があるよ』と教えてもらって、一緒に応募しました。大学時代にアメリカ留学の経験があって英語が話せるので、それで役に立てるのなら、と思ったのもありますね。担当として、海外から来た方へのまちな案内を希望。「大分は街並みも素敵だと思っし、食べ物もおいしい。外国の方は苦手かもしれないけど、団子汁とかとり天とか、郷土料理もぜひ食べてほしいですね。できれば温泉にも入ってほしいな」と、おすすめしたいものもたくさんある。

ボランティアへの挑戦は、とてもいい刺激にもなっているようで「準備のためのミーティングなどに参加すると、皆さんとても優しく、ボランティアの方々と関わることで、今は楽しいんです。これから勉強したり、いろいろ教えてもらったりして、実際に海外から来た人を案内することになったら、もっと楽しいと思うので、今からワクワクしています。本番では、自分の知識を生かして、大分の良さをうまく伝えられたらいいなと思っています」。

狙う



黒枝士揮 1992年1月生まれ、大分市出身。日出陽谷高校で本格的に自転車競技をスタートし、1年生から頭角を表す。鹿屋体育大学卒業後、2つのロードレースチームを経て、2019年から「チームブリヂストンサイクリング」に所属。
黒枝咲哉 1995年9月生まれ、大分市出身。日出陽谷高校入学時に自転車競技を始め、鹿屋体育大学在学時は数々の国内大会で優勝。卒業後の2018年から「シマノレーシング」に所属。

黒枝士揮・咲哉

黒枝士揮、黒枝咲哉。東京オリンピックでの活躍も期待されている、大分市出身の兄弟ロードレーサーだ。

父親の影響で小学1年生から自転車始めた士揮と、幼い頃からピアノを習い、音大への進学を期待されていた4歳年下の咲哉。別々の道を進んでいたはずのふたりの人生が、咲哉の、周囲も驚く決断をきっかけに交差し始める。それが、本格的に乗ったこともなかった自転車競技への挑戦だった。高校、大学と同じ道を進み、揃ってロードレーサーとして活躍する2人は、勝利を争うライバルのようでもありながら、地元の大分では一緒に練習を重ねるほど仲がいい。

そして今、兄弟は躍進の真っ只中だ。まず、昨年春にインドネシアで行われた「ツール・ド・ロンボク」の第3ステージで士揮が優勝すると、咲哉は、昨年からのUCI公認の国際レースとなった「おおいたサイクル

フェス」の1日目「いこいの道クリテリウム」で見事優勝を果たす。地元で行われる国際レースということもあり、特別な思いで臨んだ2人だったが、ゴール前で士揮や他の選手をかわした咲哉が、勝利を手にした。

そうすると、今年の大会も期待せずにはいられない。例年とは違う8月開催となり、厳しい暑さとの戦いも予想されるが、2人の意気込みも昨年以上。「できれば2連勝したい。でも昨年と一緒に嫌なので、2日目のロードレースも勝ちを狙って頑張りたい」と咲哉が語れば、士揮は「クリテリウムは咲哉が強いと思うが、2日目のロードレースは、どっちかという自分の方に分があるかな。暑さもあり、たぶん消耗戦になる。今のうちに体力をつけて、優勝したい」と意気込む。観客の目の前を通り過ぎる自転車レースは、選手の耳にも応援の声がよく届く。今年は、沿道から2人の黒枝に熱い声援を送ろう。